【学術論文】

『ニコラス・ニクルビー』と『坊つちゃん』
――漱石作品におけるディケンズの影響を追って――

Nicholas Nickleby and *Botchan*: Dickens's Influence on Soseki Natsume

大前　義幸
OMAE　Akiyuki

Abstract

This paper is a comparative study of Charles Dickens' *Nicholas Nickleby* and Natsume Soseki's *Botchan*. Soseki's work has been influenced by Dickens, and his influence can be seen everywhere in the structure, style and content of his works.

His first novel, *I Am a Cat*, was famously modeled on the composition of English writer Laurence Sterne's *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*. And *Gubijinso* was published in 1907, was written using Shakespeare's *Antony and Cleopatra* as the basis for his creation and it is well known that mentioned in the work. However, in Soseki's second novel's *Botchan*, many scholars and critics have examined the structure of his work, although there seems to be little reference to the kind of writer that he was influenced.

In this paper, I would like to focus on *Botchan* and I will consider his influence on his creation.

【キーワード】　ディケンズ，夏目漱石，比較研究，海外小説からの影響

＜目　次＞

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　海外小説からの影響
Ⅲ　教育問題について
Ⅳ　まとめ

Ⅰ　はじめに

2 年間のイギリス留学を終え、1903 年 1 月に帰国した夏目漱石(1867-1916、夏目金之助)は、第一高等学校に就任するや、東京帝国大学講師にも任命され、その年の 4 月から英文学の授業を受け持つことになった。そして、翌年の暮、正岡子規の弟子でもある高浜虚子からの勧めで『吾輩は猫である』の最初の数十枚を執筆する。それが、1905 年 1 月 1 日発行の雑誌『ホトトギス』の巻頭を飾ることになり、漱石の文壇生活が始まったのである。最初は連載を想定していたわけではなかったが、読者からの評判もよく、続いて筆を取ることになり、1906 年 8 月 1 日号まで、断続的にではあるが『ホトトギス』誌上に掲載されることになった。[1]

[1] 高浜虚子『漱石と私』書店アルス、1918 年、85-8 頁参照。

そして、この年の 4 月 1 日発行の『ホトトギス』には、さらに『坊つちゃん』が発表され、これが大好評を博したために、その 5 ヶ月後には、『草枕』が『新小説』から発表された。[2]

漱石が『猫』を皮切りにして、噴き出したすさまじい創作力と、題材の多様性、そして作風の独自性は、おそらく当時の文壇を驚かせたにちがいない。しかし、彼が 2 年間のイギリス留学のあいだに、ひたすら研究に没頭していた漱石を創作へと向かわしめたのは、何であったのか。

高浜虚子によれば、漱石が勤めていた学校に対する不満が、彼を創作活動の道へと突き進めたと述べているが、英文学研究と人生が別のものではなかったことを基本的に考えておく必要がある。つまり、彼は作家としての生活よりも英語教師および文学研究者としての時間を長く過ごしているのである。また、彼が晩年、作家生活を過ごしながらも、多くの弟子たちと「木曜会」という文学談話を定期的に開催し、文学批評や解釈などを披露していることがあった。そのため、漱石の小説家としての歩みが、少なくとも自己のおかれた現状に対する不満、あるいは人生との対決という問題に重きを置いていたならば、漱石の "Life is Literature"という考えも理解することができる。[3]

夏目漱石は、1906 年に高浜虚子の勧誘により、雑誌『ホトトギス』で『坊つちゃん』を発表する以前に、1905 年に同雑誌で『吾輩は猫である』を発表した。『吾輩は猫である』は、イギリスの作家ローレンス・スターン(Laurence Sterne. 1713-68)の『トリストラム・シャンディ』(*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*. 1759-67)の構成を手本にして執筆されたことは有名であり、また漱石自身も不慣れな執筆に作業に自身の研究テーマであるイギリスの小説を手本にすることは不思議なことではなかった。また、1907 年に発表された第 3 作目の『虞美人草』は、シェイクスピア(William Shakespeare. 1564-1616)の『アントニーとクレオパトラ』(*Antony and Cleopatra*. 1606-07)を創作の下地として執筆されたことは、漱石自身が『虞美人草』の中で何度も『アントニーとクレオパトラ』に言及し、繰り返し同じ言葉を使用していることから、よく知られていることである。[4]

しかし、2 作目の『坊つちゃん』においては、多くの研究者や批評家が作品展開や構成を考察するが、どのような作品から影響を受けたのか、また手本としたのかについて言及されている先行研究が少ないように感じられる。そのため、『坊つちゃん』の作品が、前作品との物語構成や内容が大きく変わった理由や原因に関しては、触れることが難しいかと思われる。しかし、『吾輩は猫である』は、イギリスの作品『トリストラム・シャンティ』を構成の手本とし、『虞美人草』は、『アントニーとクレオパトラ』の作品を手本として執筆されたのであれば、『坊つちゃん』も、イギリス小説の作品から影響を受けて執筆されたと考えられないだろうか。

本論文では、漱石の作品の多くが、他の作品から構成や文体を用いて執筆されたと言うことに注目しながら、漱石の 2 作目の作品『坊つちゃん』の創作において、他の作家からの影響について考察を試みたい。

---

[2] 漱石は『猫』執筆とほぼ同じ時に、『倫敦塔』(『帝国文学』1905 年 1 月 10 日号掲載)、『カーライル博物館』(『学鐙』1 月 15 日号)、『幻影の盾』(『ホトトギス』4 月 1 日号)、『琴のそら音』(同人誌『七人』5 月 1 日号、』)、『一夜』(『中央公論』9 月 1 日号)、『薤露行』(『中央公論』11 月 1 日号)、『趣味の遺伝』(『帝国文学』1906 年 1 月 10 日号)など、7 編の短編を書いていることにも注目する必要がある。

[3] 1906 年に書いた「断片」には、漱石が小説家として人生を歩む決意が書かれている。

[4] 処女作と第 2 作目は、高浜虚子が編集担当をしている雑誌『ホトトギス』で発表したが、3 作目の『虞美人草』からは、朝日新聞の専属小説家になったため、3 作目からは小説家として本格的な活動を始める。

Ⅱ　海外小説からの影響

漱石の作品を考察する前に、同時代の作家は、他の小説からの影響を受けていたのかについて少し触れてみたいと思う。まずは他の作家の作品を自らの作品とし、それを発表したことで有名な作家になった芥川龍之介(1892-1927)について触れたいと思う。彼が執筆した多くの作品は短編小説である。また、その内容においても、『芋粥』(1916)、『地獄変』(1918)、『藪の中』(1922)など、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』といった古典から題材をとったものが多いのが特徴である。そのため彼は、彼独自の構成や物語展開を執筆した作品が少なく、長編小説が書けなかった作家として有名になってしまった。

また 1904 年に生まれ、1948 年に亡くなった人気作家・太宰治も同様に、キリスト教思想やギリシャ神話などに非常に興味関心が強く、さらにはシェイクスピアのハムレット(*Hamlet*. 1600-06)を自らの作品として再構成を行い、『新ハムレット』(1941)と題して発表をした。しかし、彼が創作した多くの作品は、キリスト教思想やギリシャ神話などを題材にして執筆された『走れメロス』(1946)や『新ハムレット』、『パンドラの箱』(1946)などが、彼の代表作品として後世に残ってしまった。もちろん彼の作品は、それだけではなく、『女生徒』(1939)や『斜陽』(1947)などのように、様々な人間の心理描写を巧みに描いた作品や、一族が廃れていく姿を描いた作品も残っている。

一方、夏目漱石はどのような作品を多く残したのだろうか。さきほど触れた『吾輩は猫である』は、『トリストラム・シャンティ』の作品構成を取り入れ雑誌へ小説を発表したが、作品の内容に関して言えば、物語においての統一性は悪く、物語の前半と後半とでは同じ小説とは思えないほどに作品内容が異なってしまったのである。続いて、2 作目の『坊つちゃん』はどうであったか。現在の東北大学に蔵書されている漱石文庫から、海外小説、特に漱石がイギリス留学時代に読んでいた作品を調べてみると、女流作家のジェーン・オースティン(Jane Austen. 1775-1817)やエリザベス・ギャスケル(Elizabeth Gaskell. 1810-65)、19 世紀に文豪と呼ばれていたチャールズ・ディケンズ(Charles Dickens. 1812-70)の作品が蔵書されていた。また、当時、漱石が東京帝国大学で授業を行っていた文学論の中でも小説や作家の名前が列挙されている。

> 一に来るのは正面憎悪である。<u>作中人物の醜、悪、劣を暴露して、如何にも醜、悪、劣なるが如くに感ぜしむるのを云ふ</u>。必ずしも彼は醜なり、彼は悪なり、彼は劣なりと云ふ必要はない。たゞ醜、悪、劣の内容を列挙して、しかく感ぜしめれば宜い。ヂツキンスは此方法を用ひる。但しヂツキンスは自己の憎悪を充分に発揮せんが為に、一点の取るべき所なき醜悪漢を描き出して、不自然の痕を残すことが多い。又其評価方が外圧的で厭気を生じさせる。
>
> (『漱石全集』第十五巻、「文学評論」、スヰフトと厭世文学 p.245、下線部論者)

スイフトとは、1667 年に生まれ、1745 年に亡くなったジョナサン・スイフト(Jonathan Swift)のことであり、ここで有名な作品を挙げるとすれば、『ガリバー旅行記』(*Gulliver's Travels*. 1726)などの風刺作品を残した作家のことである。このスイフトの作品論の中に登場している「ヂツキンス」とは、これはおそらく先ほど触れディケンズのことだと考えられる。漱石は、『文学論』(1907)の中で、ディケンズの作品構成や内容について触れている。漱石の批評では、「一に来るのは正面憎悪である。作中人物の醜、悪、劣を暴露して、如何にも醜、悪、劣なるが如くに感ぜしむるのを云ふ」と述べている。つまり、デ

ィケンズの作風は、一つの敵を描き、その敵を成敗する形を取り、尚且つ、社会の中に起こりえる題材を使っていることが挙げられている。

そのことを念頭に置いて考えていくと、漱石が『ホトトギス』へ『坊つちゃん』を発表してから 2 か月後に発表した、1906 年 6 月 10 日発行の『中学世界』へ寄せた「文学断片」の中で、漱石自身が文学における基本概念を例にし、自らの文学を説明している。

文学は吾人のテーストの発表である。即ち好悪を表すものである。今吾人が世の中に住み、好悪を投げ出して外物に附着する其対象を数え立つれば、無数にして、之を数ふるだけでも吾人のテーストの変遷を知ることが出来る程である。(中略) 吾人は之を Positive と Negative との二つに分ける。Positive はテーストの一面即ち自分の好きな方面を表す、一言にして云へば満足を表す文学である。(中略) 第一は自分の厭やなものを正面より攻撃する男らしき発表、ヂツケンスが悪人を描くには此筆鋒にてまともに手ひどく当たつてゐる。 (『漱石全集』第二十五巻、「文学談話」p.160、下線部論者)

ここでも漱石は、ディケンズの作風に触れ、「第一は自分の厭やなものを正面より攻撃する男らしき発表、ヂツケンスが悪人を描くには此筆鋒にてまともに手ひどく当たつてゐる」と述べているのである。この箇所に関して、どこかで聞いたことがある文章ではないかと想像することはできないだろうか。つまり、「厭やなものを正面より攻撃する男らしき」と言う人物、つまり『坊つちゃん』の主人公・坊つちゃんではないだろうか。作品冒頭で、語り手が述べているように、坊つちゃんの性格は、

> 親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくら威張っても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囃したからである。小使に負ぶさって帰って来た時、おやじが大きな眼をして二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云ったから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。(249)[5]

漱石が「文学談話」で述べている「厭やなものを正面より攻撃する男らしき」と言うのは、坊つちゃんの性格を述べている語り手の言葉と重なるのではないでだろうか。もし、「文学談話」で触れている小説に対する姿勢と坊つちゃんの性格が共通するのであれば、この『坊つちゃん』の作品も、ディケンズの作品から影響を受けていると考えることができる。さらにディケンズの作品を詳しく見ていくと、漱石がディケンズの作品から影響を受け、『坊つちゃん』の中に反映させていると思われる作品構成であると見なすこともできる。しかし、東北大学図書館の漱石文庫に残っている彼の作品は、『二都物語』(*Tales of Two Cities.* 1859)、『ピクウィックペーパーズ』(*The Posthumous papers of the Pickwick Club*.1837)、『マーティンチャズルウィット』(*The Life and adventures of Martin Chuzzlewit.*1843-44)の三冊だけである。しかし、小森洋一をはじめとする多くの研究者が主張しているが、戦後の火災から漱石の蔵書を守ることはできたが、その後、漱石の蔵書が、学生をはじめ多くの人へ借り出されたため、返却をされなかったものや紛失した図書が存在すると指摘されている。そのため、漱石がディケンズの作品を読んでいなけれ

[5] 以下、作品からの引用は夏目漱石『漱石全集』第二巻、『坊つちゃん』東京：岩波書店、1994 年。による。引用末尾の括弧内に頁数を記す。

ば、『文学論』の中で『オリバー・ツイスト』(*Oliver Twist*. 1837-39)に関する言及や、『猫』の中で「先達てある学生にニコラス・ニックルベーがギボンに忠告して彼の一世の大著述なる仏国革命史を仏語で書くのをやめにして英文で出版させたと言ったら、其学生が又馬鹿に記憶の善い男で、日本文学会の講演会で真面目に僕の話した通りを繰り返したのは滑稽であった」(『漱石全集』第一巻『吾輩は猫である』19)と述べている「ニコラス、ニックルベー」は、ディケンズの小説『ニコラス・ニクルビー』(*Nicholas Nickleby*. 1838-39)のことである。[6]しかし、現在残っている蔵書の中から『坊つちゃん』と共通する作品構成や展開などを見つけることは難しいかと思われる。しかし、東北大学の図書館に蔵書されていない小説に関して、漱石が触れていると言うことは、漱石が留学から帰国した際に漱石自身が紛失したか、漱石が誰かへ貸していたが返却されなかった本があったかもしれない。また、戦争中に東北大学の図書館長であった小宮豊隆(1884-1966)が、戦争からの火災を避けるために漱石の蔵書や遺品を仙台へ移動させ、東北大学の図書館へ保管するまでは残っていたが、その後、利用者に盗まれたとか考えることもできるかと思う。それらのことを踏まえ、さらにディケンズの他の作品を調べてみたところ、『坊つちゃん』と似たような作品構成で描かれている小説が見つかった。それはディケンズが、『猫』や『文学論』の中でも触れていた『ニコラス・ニクルビー』という小説である。

『ニコラス・ニクルビー』はディケンズの三作目の長編小説である。しかし、ディケンズ研究者の多くが指摘しているように、この作品は、物語の前半と後半を除けば、作品内容が整っていない物語だと論じられている。つまり、『吾輩は猫である』と同様の作品構成を取っているのである。しかし、ディケンズが、作品冒頭に述べている箇所が、非常に興味深い文章である。

> Of the monstrous neglect of education in England, and the disregard of it by the State as a means of forming good or bad citizen, and miserable or happy men, this class of schools long afforded a notable example. (5)[7]

これはディケンズが、「イギリスの学校教育について、あまりにも悲惨な状況であった」ことに触れ、当時のヨークシャー地方の学校教育を前面から攻撃する内容であることに言及している。続いて次の箇所では、ディケンズが教育問題について述べている。

> Although any man who had proved his unfitness for any other occupation in life, was free, without examination or qualification, to open a school anywhere; although preparation for the functions he undertook, was required in the surgeon who assisted to bring a boy into the world,… these Yorkshire schoolmasters were the lowest and the most rotten round in the whole ladder. (5)

---

[6] 漱石が、小説執筆を始めた早々からディケンズの『ニコラス・ニクルビー』に関する言及を行っているということは、すでに彼がイギリス留学時代からディケンズの影響を大きく受けており、『文学論』の中でも言及する材料として考えていたことが理解できる。

[7] 以下、作品からの引用は Dickens, Charles. *Nicholas Nickleby*. Ed. Mark Ford. 1838-39; Oxford: Oxford UP, 2003.による。引用末尾の括弧内に頁数を記す。

一方、イギリス文学を研究していた漱石が、1906 年に『ホトトギス』で発表した『坊っちゃん』は、漱石作品の中でも珍しく、当日の教育問題や教師の資質や実態を鋭く描き、時にはユーモアを交えて書かれた作品である。つまり漱石は、ディケンズが描く登場人物に関しては、彼の言葉で言えば「醜・悪・劣」を相手に戦うヒーローたちの活躍が目立つことを指摘し、作者が読者に対して説明する必要はなく、読者の判断に任せながら登場人物の性格を理解させているのではないだろうか。つまり、『坊つちゃん』の作品展開は、『ニコラス・ニクルビー』から影響を受け、執筆を行ったと見なすことができる。さらに『ニコラス・ニクルビー』の物語展開を見ていくと、より具体的に漱石が、この作品から影響を受け『坊つちゃん』を執筆したことが安易に理解することができる。

Ⅲ 教育問題について

まずは両作品に共通する「教育」というテーマについて触れてみたいと思う。ディケンズ自身、本作品の執筆に取り掛かる直前の 1838 年 1 月 30 日に画家のハブロー・K・ブラウン(Habrow K Brown、 生存年不詳)を連れ、ヨークシャーへ取材の旅に出た。その目的は、ウィリアム・ショウ(William Shaw、 生存年不詳)という暴力教師に取材を行い、ヨークシャー学校の実態を聞き取り、『ニコラス・ニクルビー』の中で教育という場でありながら、腐敗した場所であることに言及し、ヨークシャー地方の学校教育にメスを入れることであった。その結果、ヨークシャー学校を存亡の危機に陥れることに成功したのであった。一方、漱石の『坊っちゃん』の中では、教育について触れているのであろうか。主人公の坊っちゃんが大学を卒業し、「四国辺りの中学校」へ赴任することになった。ちなみにこの中学校は、漱石自身も談話の中で「旧愛媛県立松山中学校」であると語っている。その学校に赴任したときの場面が、次の箇所である。

> おれ見たような無鉄砲なものをつらまえて、生徒の模範になれの、一校の師表と仰がれなくては行かんの、学問以外に個人の徳化を及ぼさなくては教育者になれないの、とむやみに法外な注文をする。そんなえらい人が月給 40 円で遥々こんな田舎へくるもんか。(265)

ここで高等師範学校出身の校長が、当時、教員免許を持たなくても教師になれた坊っちゃんに対し、生徒の手本・模範となり、その人徳で教え導きなさいと有難いお言葉を述べているが、その言葉に対して坊っちゃんが怒ったところである。

当時、夏目漱石が松山で英語教師をしていたとき、そこでの教育指導及び生徒に対して言及している個所は、ほとんどない。さらに 1895 年 11 月 6 日付の親友・正岡子規に送った書簡にも「此頃愛媛県には少々愛想が尽き申候故どこかへ巣を替へんと存候。(中略)貴君の生まれ故郷ながら余り人気のよき処では御座なく候」程度の事しか書かれていないのである。しかし、7 月 24 日付で後任の玉虫一郎あての書簡には、「松山中学の生徒は出来ぬ癖に随分生意気に御座候間、可成きびしく御教授相成度と在候。又地方の人情は怜悧の代わりに少しも質朴正直の事無之候間、是亦御含み置成[度]候。」と少々厳しい表現になっているが、これらの書簡には盛り込めない、不満や憤激、失望、悩みが漱石の中に鬱積していたことは間違いないと思われる。これは漱石自身が、当時の英語教育と言うよりも、田舎の中学校での生活や生徒に対して不満を持ち、生活に馴染めなかったことが一番の原因と考えられている。

しかし、改めて『坊っちゃん』に登場する人物に目を向けると、もっとも登場回数が多いのが赤シャツであることに気付くかと思う。そして坊っちゃんは、ディケンズ同様に真っ向から、この赤シャツを批判する態度を取っていくのである。例えば、坊っちゃんとの最初の出会いは、中学校に赴任した初日。職員室での各先生に挨拶をしたとき、そのときの赤シャツの印象が次の様に語られている。

> 挨拶をしたうちに教頭のなにがしと云うのが居た。これは文学士だそうだ。文学士と云えば大学の卒業生だからえらい人なんだろう。妙に女のような優しい声を出す人だった。もっとも驚いたのはこの暑いのにフランネルの襯衣を着ている。いくらか薄い地には相違なくっても暑いには極ってる。文学士だけにご苦労千万な服装をしたもんだ。しかもそれが赤シャツだから人を馬鹿にしている。あとから聞いたらこの男は年が年中赤シャツを着るんだそうだ。妙な病気があった者だ。当人の説明では赤は身体に薬になるから、衛生のためにわざわざ誂らえるんだそうだが、入らざる心配だ。そんならついでに着物も袴も赤にすればいい。(266)

ここでの坊っちゃんの価値観は明瞭で、文学士である大学卒業生はえらい人だと主張している。坊っちゃんは偶然通った「物理学校」[8]を卒業しただけであるため、当時の学校系統図から考えてみても、赤シャツは、さらに上の帝国大学卒業となる。つまり校長は高等師範学校卒業となれば、当時の学歴社会から考えても赤シャツが、この学校の中で一番えらい人になると思われる。そのように解釈をすれば、バッタ事件の処分について議論する職員会議での場面、教頭の赤シャツが校長に続いて次のように述べている。

> 私も寄宿生の乱暴を聞いてはなはだ教頭として不行届であり、かつ平常の徳化が少年に及ばなかったのを深く慚ずるのであります。でこう云う事は、何か陥欠があると起るもので、事件その物を見ると何だか生徒だけがわるいようであるが、その真相を極めると責任はかえって学校にあるかも知れない。だから表面上にあらわれたところだけで厳重な制裁を加えるのは、かえって未来のためによくないかとも思われます。かつ少年血気のものであるから活気があふれて、善悪の考えはなく、半ば無意識にこんな悪戯をやる事はないとも限らん。でもとより処分法は校長のお考えにある事だから、私の容喙する限りではないが、どうかその辺をご斟酌になって、なるべく寛大なお取計を願いたいと思います。(315-6)

自らの不行き届きや、その人の人徳が生徒に及ばないことを「慚ずる」と主張している。これは、直前に「学校の職員や生徒に過失のあるのは、みんな自分の寡徳の致すところで、何か事件がある度に、自分はよくこれで校長が勤まるとひそかに慚愧の念に堪えんが、不幸にして今回もまたかかる騒動を引き起したのは、深く諸君に向って謝罪しなければならん。」(315)という校長の一席に物議を投じただけである。しかし、よく考えてみると、校長も教頭もこの事件に関する責任をとっている節が考えられない。さらに続けて赤シャツは、「でもとより処分法は校長のお考えにある事だから、私の容喙する限りではないが、どうかその辺をご斟酌になって、なるべく寛大なお取計を願いたいと思います」(316)と議論を先導するが、処分の権限は校長にある。だから私は、「あなたを差し置いて口出しは致しません」と添えているだけである。さらに、坊っちゃんに対して、怒りを買った人物が野だいこであった。

---

[8] 現在の東京理科大学のこと。

実に今回のバッタ事件及び咄喊事件は吾々心ある職員をして、ひそかに吾校将来の前途に危惧の念を抱かしむるに足る珍事でありまして、吾々職員たるものはこの際奮って自ら省りみて、全校の風紀を振粛しなければなりません。それでただ今校長及び教頭のお述べになったお説は、実に肯綮に中った剴切なお考えで私は徹頭徹尾賛成致します。どうかなるべく寛大のご処分を仰ぎたいと思います。(317)

いつものへらへら調で、職員会議で通用する言葉を羅列した野だいこだが、しかし結論は校長と教頭に「徹頭徹尾賛成します」と発言しているだけである。「言葉はあるが意味がない」教師の発言として描かれているが、これこそが漱石の教師批判の最たるものではないだろうか。そして、坊っちゃんと赤シャツが初めて会った時から感じていた欺瞞の気持ちが噴出し、その後、赤シャツに対しては違和感と疑惑の目へと変わり、山嵐の追放作戦やマドンナをめぐるあくどい策略、坊っちゃんの利用、うらなりの左遷など、すべてが赤シャツの企てだと断定し、物語終盤に描かれる、赤シャツと野だいこが芸者との逢い引きをしたと考えた帰路を襲う。そのため、読者は、この赤シャツの天誅場面に喝采を送ったのである。

一方、ディケンズの『ニコラス・ニクルビー』では、この作品の最後の場面には、すでに主人公のニコラスは学校を去っているため、『坊つちゃん』の最後の場面とは重なりはしないが、13 章でニコラスが学校を去る場面が描かれている。

'Stand back,' cried Squeers, brandishing his weapon. 'I have a long series of insults to avenge,' said Nicholas, flushed with passion; 'and my indignation is aggravated by the dastardly cruelties practiced on helpless infancy in this foul den. Have a care; for if you do raise the devil within me, the consequences shall fall heavily upon your own head!' He had scarcely spoken, when Squeers, in a violent outbreak of wrath, and with a cry like the howl of a wild beast, spat upon him, and struck him a blow across the face with his instrument. of torture, which raised up a bar of livid flesh as it was inflicted. Smarting with the agony of the blow, and concentrating into that one moment all his feelings of rage, scorn, and indignation, Nicholas sprang upon him, wrested the weapon from his hand, and pinning him by the throat, beat the ruffian till he roared for mercy. (155)

第 13 章での、知的障害をもつスマイク少年に対する酷い仕打ちは、目に余るものがあり、ニコラスの同情をかき立てずにはいられなかった。ある日、スクィアーズの虐待が極度に達するのを目の当たりにしたニコラスは、校長に飛び掛かり、彼が悲鳴を上げるまで懲らしめて、学校を立ち去る。そして、『坊つちゃん』の最後の場面も、坊っちゃんと山嵐が赤シャツと野だいこの秘密の色里遊びの現場を押さえて、こっぴどい制裁を加える場面と相似しており、両作品とも教育という設定であり、最後に校長に制裁を加える場面は、まさに互いにパラレルな世界を描いていると述べても良いと考えられる。

Ⅳ まとめ

以上のことから、ディケンズの『ニコラス・ニクルビー』と漱石の『坊つちゃん』を比較考察してきたが、両作品を改めて考察したとき、夏目漱石はディケンズからの影響を大きく受けており、その影響が『坊つちゃん』を始め、『二百一〇日』(1906)での『二都物語』の問答、そして『吾輩は猫である』の先生のディケンズへの言及などを考えると、彼の作品内には随所にディケンズを意識した内容が散見されている。しかし、漱石はディケンズの文体や作品内容に関しては、サッカレー(William Makepeace Thackeray. 1811-63)よりも劣っていることに言及している。

> 小説を作るにしても、文章を作るにしても同じことだ、サツカレー如きは其様云ふ事を心得てるから、拙な感情に訴える方を為なかつと思ふ。ヂツケンスは之に反して物を精一杯に進んで書く人である、だから滑稽的になる、其れも可笑しいことを云ふ方で成功しているが、泣かせる方では其様に云ふのは失敗し易い、ヂツケンスの人を泣かせるは、殊更にする様に思ふ、殊更に泣かせる為に、色々の事件を構へたり、文章をこしらへてつくつている、此れも釣り込んで読ませれば可いが、釣り込まれる先に此の程ではないと思ふ感が先づ起る、サツカレーなどは人を泣かせる場合でも多くは一頁と続けて居らぬ、二三句で済して終うので其方が或る場合は反つて有効である。
>
> (『漱石全集』第二十五巻、「談話(現時の小説及び文章に付て)」、p.120)

漱石は、ディケンズが余りにも精一杯書き過ぎるために、彼には余裕がなく、かつ「滑稽的」であるということを指摘し、喜劇的な点ではまだしも、泣かせる面では、はるかにサッカレーに及ばない作家であると述べている。しかし、ニクルビーが学校長を殴り、学校を去る場面は、『坊つちゃん』に登場する主人公と山嵐の関係に相似していると改めて断言することができる。さらに、『坊つちゃん』の中での赤シャツと坊っちゃんとの教育問答は、ディケンズが『ニコラス・ニクルビー』で描きたかったヨークシャー地方での学校教育の一場面に共通していると考えることができのではないだろうか。そのうえ、ディケンズが『ニコラス・ニクルビー』を執筆した目的である、ヨークシャー学校に関しての社会風刺は、ディケンズの想像力が、それを現実以上に印象深いものに描き上げたことで成功したものだと思われる。そのことが作品内容を喜劇的な要素としており、校長のスクウィアーズは、悪党であると同時に笑いの対象となり、こうした喜劇内容が風刺の力を弱め、そしてより社会風刺を印象的なものにしているのある。その作品構成が、漱石の初期作品にとっては得るものが多い作品構成だったと考えられる。それらのことが理由で、両作品とも物語の展開において共通する点が多く、「教育」というテーマを始め物語は家族の離散から始まり、新しい家族をつくる努力、そして最後に伝統を守りながら、新しい理想的な家族をつくるプロセスは、ディケンズと漱石に共通する彼ら自身が経験した出生からの生い立ちを無意識に描いていたのだろう。

最後に、もう一度両作品に共通することに触れてみたいと思う。『ニコラス・ニクルビー』では、作品冒頭で、伯父のラルフ・ニクルビーが亡くなったため、伯父の遺産 5000 ポンドのうち 1000 ポンドがニコラスの父親の手に入ったが、一方『坊つちゃん』の中でも、冒頭で主人公・坊っちゃんの両親が亡くなり、その後、兄も就職で遠くへ行くために家を売り払い、そのお金を二人で分けることになる。その時に主人公の手元に入ったお金が「600 円」と、どちらも作品冒頭で遺産相続の場面が描かれている。

また、『ニコラス・ニクルビー』の中には、3 つの物語を独立させながら展開しているが、それに対して『坊つちゃん』の中でも主人公の過去の思い出を語る話、清の視点と別ストーリーを独立させて展開しているのである。これらの共通点は偶然なのか、それともディケンズからの影響なのか、改めて、両作家を比較して見る価値があるのではないだろうか。

本稿は、ディケンズフェロウシップ春季大会(2017年6月10日、於：松山大学文教キャンパス)における発表「『ニコラス・ニクルビー』と『坊ちゃん』 ―漱石作品におけるディケンズの影響を追って―」と、第57回全国大会日本英学史学会(2020年11月1日、於：岩手県立大学アイーナキャンパス)における発表「夏目漱石の作品における他の作家からの影響―『坊ちゃん』を中心に―」をもとに大幅な加筆訂正を施したものである。

参考文献

Dickens, Charles. *Nicholas Nickleby*. Ed. Mark Ford. 1838-39; Oxford: Oxford UP, 2003.

Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. London: Chapman and Hall, 1892.

Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Penguin, 1972.

Pyle, Kenneth. “Meiji Conservation.” *Modern Japanese Thought*. Ed. Bob Tadashi Wakabayashi. Cambridge: Cambridge UP, 1998.

大島カレン「摩擦と繋がりの源泉:『ニコラス・ニクルビー』と『坊っちゃん』にお ける家族」、図書館情報大学、2003 年。

夏目漱石『漱石全集』東京：岩波書店、1994~2000 年。

松村昌家「漱石とリットン、ディケンズ―逍遥を超えて」、『文豪たちの情と性へのまなざし』、ミネルヴァ書房、2011 年、 pp.61-77。